

令和 6 年 1 0 月 2 9 日現在

機関番号：2 4 4 0 5

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：2 0 K 1 2 8 9 2

研究課題名（和文）芸術祭は地域づくりにつながるのか 中長期的効果・プロセス・条件に関する定性的研究

研究課題名（英文）Art Festivals' Outcome and Impact on Regional Development: A Qualitative Study of Medium- to Long-Term Effects, Processes, and Conditions

研究代表者

吉田 隆之（Yoshida, Takayuki）

大阪公立大学・大学院都市経営研究科・准教授

研究者番号：0 0 7 7 1 8 5 9

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000 円

研究成果の概要（和文）：過去5、6年間で政策転換やパンデミック禍で中止・延期される芸術祭が相次ぐなか、芸術祭を契機として自立的に活動するプロジェクトとして、「森ラジオ ステーション×森遊会」、「小須戸ARTプロジェクト」を取り上げ、とくに、前者については、アート活動を軸に橋渡し型ソーシャルキャピタルが形成されたとする余地があることに注目した。

また、ドクメンタ15など海外芸術祭の事例については、芸術祭のアートマネジメントの新動向として捉え、国内では地域的要素、国外では脱欧米中心化を重視する傾向が台頭してきており、そこに重要な意義が見出せないかという問題提起をした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

国内の芸術祭が流行した2010年代を経て、開催意義が問われるなか、本研究は、芸術祭を契機として自立的に10年間活動するプロジェクトに地域づくりの可能性を見出した点に社会的意義がある。ようは、芸術祭等の効果を等身大で認識し、まちづくり等の施策と組み合わせ、地域に寄り添うことが大事だということだ。学術的には、芸術祭を契機としてソーシャルキャピタル形成が認められかについては、すでに肯定する定量的・定性的研究があるが、定性的研究については、一般性ある主張をするために多くの事例研究を行う必要がある。そうした一般的主張をするために「森ラジオ ステーション×森遊会」の事例研究を行った点で学術的意義を持つ。

研究成果の概要（英文）：In the past five or six years, a number of contemporary art festivals were tragically cancelled or postponed due to policy changes or the coronavirus pandemic. My research focuses on the "Mori Radio Station x ShinYukai" and "Kosudo ART Project", which were initiatives born out of art festivals. In particular, the former project was noted for its potential to form bridging social capital around art activities. The cases of overseas contemporary art festivals, such as Documenta 15, were regarded as new trends in art management for art festivals. A symposium that I organized raised the question of whether a trend is emerging in which Japanese domestic arts festivals are emphasizing regional elements and international arts festivals are focusing on points beyond Eurocentrism, and whether we could assign substantial significance to this.

研究分野：文化政策

キーワード：芸術祭 地域づくり アートプロジェクト アートマネジメント ソーシャルキャピタル 現代アート
ドクメンタ

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

内外で数ヶ年の周期で開催され、現代美術を内容とする芸術祭が開催され、国内でも2000年以降芸術祭が流行する。2016年度～2018年度に開催された事業費1億円以上の芸術祭は13を数える。地域づくりへの期待が社会的関心と呼ぶ一方で、地域づくりにつなげるのが容易でない現状がある。こうしたなか、芸術祭の地域づくりの効果に着目し、ソーシャルキャピタルによる定量的・定性的研究が取り組まれてきた(松本, 2005; 寺尾, 2014; 鷺見, 2014)。しかしながら、申請者以外のこれまでの研究では、個別の地域・プロジェクトごとに見ていく視座がなかった。

2. 研究の目的

2020年度から数ヶ年で開催から約10年間経過する3つの芸術祭を対象に、個別の会場・集落・プロジェクトに着目し、定性的分析により芸術祭の地域づくりの中長期的効果を明らかにし、その具体的プロセスを詳細に解明する。3つの芸術祭とは、「水と土の芸術祭 小須戸 ART プロジェクト」、「いちはらアート×ミックス 内田・月崎・養老溪谷」、「札幌国際芸術祭 札幌市資料館」である。そのうえで、すでに中長期的効果等を明らかにした2事例(「あいちトリエンナーレ 長者町地区」、「大地の芸術祭 訪平集落」)を加え、計5事例で芸術祭が地域づくりにつながる主な3条件が、地域資源の活用、地域コミュニティの主体性、持続可能な戦略を持つことである、との仮説を検証し、政策立案可能な戦略を提示する。

3. 研究の方法

効果・具体的プロセスは、ソーシャルキャピタルを用いて定性的に分析する。分析の評価指標と基準は、あいちトリエンナーレ等の事例研究で用いたものとした。

4. 研究成果

本研究では、2020年以降数ヶ年で開催から約10年が経過する水と土の芸術祭、いちはらアート×ミックス、札幌国際芸術祭の3事例の芸術祭を中心に、地域づくりの中長期的効果・具体的プロセスを定性的に分析することとしていた。しかし、水と土の芸術祭はそもそも首長の交替による政策転換もあり、行政主導の芸術祭としての開催は2018年度が最後となった。加えて、コロナ禍で、2020年度に開催予定だったいちはらアート×ミックスが延期され、札幌国際芸術祭は中止とされ、研究の進捗がままならない状況となった。

(1) 2020 年度

そうしたなか、あいちトリエンナーレ2019では、一部の作品を攻撃する電凸などで展示中止となった事態が起き、かつ、閉幕後新たな市民活動の芽がめばえていた。そこで、あいちトリエンナーレ2019にまつわる事態の調査・分析に比重をうつし、研究成果を単著『芸術祭と危機管理 表現の自由を守るマネジメント』(水曜社, 2020)にまとめた。すなわち、まず、あいちトリエンナーレ2019で、電凸などで展示中止となった事態を、網羅的、時系列で概観し、客観的な事実を明らかにした。つぎに、表現の自由・芸術の自由、公的補助金問題、検証委員会のありかた等を含む「あいちトリエンナーレ」を巡る論点を分析した。さらに、芸術祭の地域づくりの観点から、閉幕後にボランティアを主体として市民活動が継続された点に注目し、都市型芸術祭で、ボランティアが脇役でなく主役となり、地域とアートの両方に通じた人材として育つ可能性に言及した。

(2) 2021 年度

コロナ禍の継続などで国内の芸術祭のリサーチがままならないことなどにかんがみ、改めて国内の芸術祭の既存の研究を再分析しつつ、海外の芸術祭の調査、分析を行い、国内の芸術祭との比較を視野に入れた研究を展開した。

まずは、国内の芸術祭に関しては、拙論『《長者町山車プロジェクト》と《STUDIO TUBE》の比較 文化政策的意義と美学への応答都市型芸術祭』において、あいちトリエンナーレが地域づくりに影響を与えた主な2つのプロジェクトを取り上げ、両者が相まって地域に明確なインパクトを与えた稀有な例だったことに言及した。

一方で、イギリスのコベントリー市で開催された「コベントリー・ビエンナーレ」、同時開催の「ターナー賞・展覧会」のリサーチを行った。その結果、アートコレクティブや地域に根差した活動が注目される世界の潮流を知り、パンデミック後の国内の芸術祭の地域づくりに関しても、重要な示唆を得た。くわえて、2021年12月に国際シンポジウム「ポストオリンピックとアートプロジェクト - ストリートワイズ・オペラ/アート&ホームレス インターナショナルとココロームの交流からみえること」をオンラインで開催した。コベントリー市で2021年秋に開催されたアート&ホームレス芸術祭などをとりあげ、ポストオリンピックのアートプロジェクト・芸術祭の一つのあり方を示唆した。それは、地域課題を踏まえた地域発の取り組みの普遍性を発見・再確認し、世界につなげて連帯し、前に進んでいく。ときには、オリンピック・万博などの大規

模イベントともつながり、変革を起こしていくという方向性である。

(3)2022 年度

コロナ禍の状況が芳しくなく、2023 年度も 2022 年度に引き続き、国外の芸術祭のリサーチを通して、国内の芸術祭の地域づくりに関する新たな知見を得る研究を展開した。地域づくりに重きをおく国内芸術祭の開催意義について、国外との比較で相対化をこころみた。具体的には、2022 年度に、地域づくり・都市変革を意識したと考えられる国際的な 2 つの芸術祭をリサーチした。

ドクメンタ 15 では、インドネシアのアーティスト・コレクティブ「ルアン・ルパ」がディレクターとなり、グローバルサウスで、社会課題解決に取り組むアーティスト・コレクティブを多く招聘した。くわえて、工業地域と住宅地域が入り混じった東地区への展開にも挑戦し、開催地域の文脈の歴史との対話が見られた。ところが、その一方で、「反ユダヤ主義的だ」とある展示作品が撤去されるという「検閲」がなされ、ドクメンタ 15 の開催自体、かつ、その存続すら揺るがす事態が起きた。ドクメンタ 15 について、ドイツでは客観的な議論が困難になっているからこそ、距離を置いたアジア、とくに日本で分析する意義があると考えた。

一方、マニフエスタ 14 は、コソボで開催された。コソボは、近時、新自由主義的政策が取られ、首都プリシュティナでは、貧富の差が拡大し、独自の都市景観が失われようとしている。そうしたなか、1 回の芸術祭で公共空間を回復し、都市を変革できるかという挑戦をしていた。1 回の芸術祭で都市変革に直接アプローチする手法は、国内事例では例がなく、検証する意義は高いと考えられる。

(4) 2023 年度

2023 年度は、コロナ禍が改善され、国内で芸術祭が開催され、現場でのリサーチが可能となった。これまで、芸術祭の地域づくりについて、開催から数年では、継続的な変化につなげることは容易でないことも明らかとしてきた。一方で、コロナ禍を経て、芸術祭を契機として、芸術祭から自立的に活動し、しかも 10 年以上継続するプロジェクトが各地で見られる状況にある。そこで、最終年度は、芸術祭を契機として自立的に活動するプロジェクトとして、いちはらアート×ミックスを契機とした「森ラジオ ステーション×森遊会」、水と土の芸術祭を契機とした「小須戸 ART プロジェクト」を取り上げた。とくに、前者については、アート活動を軸に橋渡し型ソーシャルキャピタルが形成されたとする余地があることに注目し、研究成果を研究ノート「芸術祭を契機としてソーシャルキャピタルが形成されるのか 森ラジオステーション×森遊会を事例に」(『地域活性研究』21, 2024) に公表した。

また、2021 年度～2022 年度に取り上げた国外芸術祭の 2 事例については、芸術祭のアートマネジメントの新動向として捉え、シンポジウム開催などで、芸術と社会とを結びつける役割を持つアートマネジメントのスタンスとして、国内では地域づくり、国外では脱欧米中心化を重視する傾向が台頭してきており、そこに重要な意義が見出せないかという問題提起をした。

(5) まとめ

最後に、2020 年度から 2023 年度の研究成果をまとめておこう。本研究では、芸術祭は地域づくりにつながるのかという問いを立てた。開催から約 10 年間経過する 3 つの芸術祭を対象としたが、芸術祭本体の継続的な変化を捉えることが容易でないことも明らかとしてきた(吉田, 2019)。一方で、コロナ禍を経て、芸術祭を契機として、芸術祭から自立的に活動し、しかも 10 年以上継続するプロジェクトが各地で見られる状況にある。ソーシャルキャピタル(社会関係資本)は、資本であるから継続性が要件となり、まちづくりなどの経験則から 10 年単位で捉えるのが一般的である。各事例でソーシャルキャピタルの形成の有無を学術的に検証する時期にきている。そこで「いちはらアートミックス」の月崎地区の取り組みである「森ラジオ ステーション×森遊会」を取り上げ、アート活動を軸に橋渡し型ソーシャルキャピタルが形成されたとする余地があることに注目した。

芸術祭を契機としてソーシャルキャピタル形成が認められかについては、先行研究で紹介したように、すでに肯定する定量的・定性的研究がある。ところが、定性的研究については、一般性ある主張をするために多くの事例研究を行う必要がある。そうした一般的主張をしていくための事例研究を行った点に学術的意義がある。

また、国内の芸術祭が流行した 2010 年代を経て、開催意義が問われるなか、本研究は、芸術祭を契機として自立的に 10 年間活動するプロジェクトに地域づくりの可能性を見出した点に社会的意義がある。ようは、芸術祭等の効果を等身大で認識し、まちづくり等の施策と組み合わせ、地域に寄り添うことが大事だということだ。入場者数、経済波及効果重視、かつ芸術祭のみで成果を求めるあり方に一石を投じることとなろう。

一方で、副次的な問いである芸術祭が地域づくりにつながる 3 条件については、パンデミック禍の影響もあり、「森ラジオ ステーション×森遊会」の事例以外の国内調査を進めることができず、本研究では実証できなかった。今後の研究課題としたい。

それに対して、海外事例のリサーチに力点を置いたことで、アートコレクティブの活動などに比重が置かれる世界の潮流を捉えることができた。そうした潮流を踏まえ、芸術祭のアートマネジメントの新動向を捉え、国内では地域づくり、国外では脱欧米中心化を重視する傾向が台頭し

てきており、そこに重要な意義が見出せないかという問題提起をした。

<引用文献>

鷲見英司, 2014 年, 「大地の芸術祭とソーシャル・キャピタル」, 澤村明編『アートは地域を変えたか 越後妻有大地の芸術祭の十三年 2000-2012』, 慶應義塾大学出版会, 63-99 ページ.

寺尾仁, 2014 年, 「大地の芸術祭と人々 住民, こへび隊, アーティストが創り出す集落・町内のイノベーション」, 澤村明編『アートは地域を変えたか 越後妻有大地の芸術祭の十三年 2000 大地の芸術』, 慶應義塾大学出版会, 101-146 ページ.

松本文子ほか, 2005 年, 「アートプロジェクトを用いた地域づくり活動を通したソーシャルキャピタルの形成」『環境情報科学論文集』第 19 号, 環境情報科学センター, 157-162 ページ.

吉田隆之, 2019 年, 『芸術祭と地域づくり “祭り” の受容から自発・協働による固有資源化へ』, 水曜社.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 吉田隆之, 片山泰輔, 小林真理, 志村聖子, 藤野一夫 | 4. 巻 20 |
| 2. 論文標題 あいちトリエンナーレからの問題提起 | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 アートマネジメント研究 | 6. 最初と最後の頁 66-74 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 吉田隆之 | 4. 巻 217 |
| 2. 論文標題 大阪府市の文化政策に何が必要なのか - コロナ禍の世界のアート・芸術祭の潮流を踏まえて - | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 大阪市政調査会 | 6. 最初と最後の頁 42 - 52 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 吉田隆之 | 4. 巻 第1号 |
| 2. 論文標題 長者町山車プロジェクト》と《STUDIO TUBE》の比較-文化政策的意義と美学への応答 | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 ふたつの島 KOSUGE1-16 × Ndegata Instant Partyに関する比較論考 | 6. 最初と最後の頁 - |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 吉田隆之 | 4. 巻 21 |
| 2. 論文標題 芸術祭を契機としてソーシャルキャピタルが形成されるのか 森ラジオ ステーション×森遊会を事例に | 5. 発行年 2024年 |
| 3. 雑誌名 地域活性研究 | 6. 最初と最後の頁 - |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

| |
|--|
| 1．発表者名 吉田隆之 |
| 2．発表標題 芸術祭を契機としてソーシャルキャピタル形成がされるのか-森ラジオ ステーション×森遊会を事例に- |
| 3．学会等名 地域活性学会 |
| 4．発表年 2023年 |

| |
|--|
| 1．発表者名 吉田隆之 |
| 2．発表標題 社会人大学院のアートマネジメント教育 - "記憶の地図" を巡るアートプロジェクトを 事例に |
| 3．学会等名 日本アートマネジメント学会 |
| 4．発表年 2023年 |

〔図書〕 計1件

| | |
|---------------------------------|----------------|
| 1．著者名 吉田隆之 | 4．発行年 2020年 |
| 2．出版社 水曜社 | 5．総ページ数 200 |
| 3．書名 芸術祭の危機管理 表現の自由を守るマネジメント | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6．研究組織

| 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|---------------------------|-----------------------|----|
|---------------------------|-----------------------|----|

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

| | |
|--|--------------------|
| 国際研究集会 ポストオリンピックとアートプロジェクト - ストリートワイズ・オペラ / アート&ホーム レス インターナショナルとコッルームの交流からみえること | 開催年 2021年～2022年 |
|--|--------------------|

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 | | | |
|---------|-------------------------------------|--|--|--|
| ドイツ | Institute of Art and Visual Culture | | | |
| 英国 | Goldsmiths, University of London | | | |